

## あとがき

千葉市に郵便貯金の施設を建設する話は平成4年、千葉市と郵政省の間で開始されました。施設の内容が決まり、基本設計が始まったのは平成7年夏です。

施設の内容を地元と協議していた郵政省貯金局の担当者は、建築部（現＝郵政省施設部）に設計依頼をするにあたり、地元の要望を最大限実現してもらいたいということを条件づけました。したがって、設計開始の時点から、郵政省建築部設計課と千葉市企画調整局の間で話し合う機会を持つことになりました。

当時、千葉駅東口の富士見町、栄町は政令指定都市の表玄関として満足できる状況ではありませんでした。都市政策上、民間再開発を軌道に乗せるため、公的施設がその先導的役割を果たすことが求められることがあります。1900年に完成したボストンシンフォニーホールは、チャールズ川沿いの沼地に開発されたバックベイのさらにボストンの中心市街地から離れた場所に建っています。バックベイは今でこそ、ボストンを代表する高級住宅地ですが、開発当時は川の匂いがする新興住宅地だったのでしょう。シンフォニーホールはその開発を誘導する役目を担っていたと思います。ボストンシンフォニーホールと比較するのはおかしいかも知れませんが、文化施設が再開発の起爆剤として果たしうるポテンシャルの高さについて、千葉市の方々に説明し、今回の施設を駅前地区再開発のスタートアップビルとして位置付けることを提案しました。

千葉市企画調整局の澤喜蔵調整課長は私の考えを受け止めてくださり、将来の再開発を考えて、郵政省用地と敷地が接する市道の交換を行い、敷地周囲の道路を整備する決断をしてくださいました。島田行信企画調整局長（現助役）、武藤昌義政策調整課主幹をはじめ、地元の方々にあらゆる面でご支援をいただいたお陰で、当初の構想どおりの施設を完成させることができました。

今回の施設が地元発展の契機になることを信じて、長い工事期間中、ご協力いただいた地元町内会の方々に御礼を申しあげたいと思います。周辺街路の整備、特に電線地中化が実現したのは、みゆき通り商栄会の平山紀世会長のお陰です。また会長はオープニングコンサートの一環として、由紀さおり童

謡コンサートを企画・実行してくださいました。工事期間中、JVの方々は毎朝現場周辺の清掃活動をされました。自転車が放置され、ゴミが堆く捨てられていた敷地周辺が、捨てられても捨てられても、3年間継続して毎朝清掃をした結果、ゴミが無くなり、街のイメージが少しずつ変化することに繋がりました。

狭い敷地での難工事を無事故で完了されたことだけでなく、川口忠夫所長、坂本勇雄副所長をはじめとするJVの方々の毎朝の地道な清掃活動にも、敬意を表したいと思います。

平成11年9月26日、永田音響設計による「ホール音響テスト演奏会」を実施しました。スピーカー音による残響時間等の音響測定の後、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉による室内楽コンサートを、お世話になった地元関係者、工事関係者とその家族を招待して開催しました。指揮は九州交響楽団常任指揮者の大山平一郎氏、ヴァイオリン独奏は本庄篤子氏で、音響設計者である豊田泰久氏の意図をよく理解されて、ホールの特性を活かした演奏をしていただくことができました。このようなコンサートが今後、数多く開かれることが、プロジェクトに携わってきた者たちの願いです。そのため施設オープン後も、従来から行ってきた貸館としての郵便貯金ホールの枠組みを超えた運営方法を模索しているところです。

施設が無事オープンできたことは、プロジェクトの企画、運営面を担当してこられた郵政省貯金局の和田公夫課長補佐、郵便貯金振興会企画本部の橋本善司部長をはじめとする関係者の理解と協力のお陰です。施設開業の立ち上げには「ば・る・るプラザ千葉」の佐藤孝幸支配人、ば・る・るホールの運営にはシアターマネジメントプランの星野茂登子代表のご尽力をいただいています。構想スタートから8年、その間、バブル崩壊や行政改革等の大きな社会経済状況の変化がありました。担当者が代わることもあっても、一貫して当初の目標を見失うことなく実現することができたのは、当初の企画の確かさと関係者一同の情熱の賜だと思います。今後末永く、千葉市民の方々の文化・余暇活動の拠点として、活用されることを願っています。